

社長の経営哲学の構築にお役立ちする  <h1 style="text-align: center;">経営者への活きた言葉</h1>	税理士法人 優和  <b>TEL 03-3455-6666</b> <b>FAX 03-3455-7777</b>
--	--

## 経営者への活きた言葉

### 先代が残してくれた言葉を受け継ぐ 玉置 半兵衛（半兵衛麩会長）

1. 手前どもは「半兵衛麩」と申しまして、京都の五条大橋の近くでお麩を作っております。私で 11 代目、創業から数えて 328 年になります。老舗（しにせ）と呼んでいただくこともありますが、実はこれ、先代が嫌がっていた言葉です。店が老いたらしまいや。しにせの「し」が「止」になり「死」にならんように、いつも新たな気持ちで「新店」（しんみせ）にならないかん。「しん」は「進」「清」「慎」「心」…どれも大事。時には「辛」もあるけど、「辛」抱や。父はそんな話をあれこれと、幼い私にしてくれました。
2. ええか、しゃべることを「言」うと書く。ニンベンを付けると「信」や。しゃべることは「云」うとも書く。ニンベンを付ければ「伝」。人はやるべきことをちゃんとやり、言うべきことをしっかり言ってこそ、伝わり、信じてもらえる。お客様にも、一緒に働いてくれる人たちにも、ちゃんと、感謝の気持ちを伝えなさい。そうして「信」じ合う「者」が集まってこそ「儲」けになる。もう一度分けて「信」と「者」の信者。「この人の言うこと、やることは間違いない」と相手に信じてもらえてこそ、商売を続けることができる。父はそんなことを話してくれました。
3. うちの「麩」っと吹けば飛ぶような商いですが、馬鹿正直にやっていたら、誰かがちゃんと見てくれる。世の中はどんどん変わっていきますが、安易に道を曲げてはいけません。濡れ手で粟なんて一時のこと。それよりも「心」を込めて麩を作り、それを楽しみにのれんをくぐってくれるお客様の笑顔を大事にする。それに勝ることはありません。  
（参考：「日経ビジネス」2017 年 4 月 17 日号）

## 経営者のための理念・哲学

### 地方人・日本国民・国際人 童門 冬二（作家）

1. 私が師をいろいろな角度から捉える中で一番印象に残ったのは、大先輩・吉川英治さんの「我以外皆我が師」という言葉でした。また、松田松陰は「学べる人からいいとこ取りをしる」と言っています。他に欠点があったとしても、どこかいいところがあつたらそれを学び取れとうことです。
2. 松陰の師である佐久間象山の言葉に「私は松代（長野県松代町）人である。しかし、地方人でありながら、日本国民であり、世界人でもある」とあります。これは、一村一品運動で知られる平松守彦・元大分知事の説いたグローカリズムに通じるものがあります。つまり、日本人は地方人であり、日本国民であり国際人という三つの人格を持っている。松陰が社会や自分を見つめる視点は、象山から教わったこの三つだと言ってもいいと思います。  
（参考：「致知」：2017 年 7 月号）

## 人事・労務について

### 動き出した「かとく」

1. 東京・九段第 3 合同庁舎の 13 階。ここに東京労働局の精鋭部隊で結成される通称「東京かとく」が詰めている。「かとく」とは、「過重労働撲滅特別対策班」のこと。悪質な長時間労働を取り締まる専任組織として、ちょうど 2 年前にできた。厚生労働省にある「本省かとく」が司令塔。東京労働局（東京かとく）と大阪労働局（大阪かとく）が手足となる実働部隊だ。
2. これまで、労基署は事業場単位で一件一件シラミつぶしに取り締まってきた。だが、「かとく」のターゲットは大企業本社。企業単位で効率的に取り締まることができるようになった。標的もブルカラーからホワイトカラーへ移り、「四大ターゲット」は次の通りだ。  
**(1)** ホワイトカラーや管理職（ホワイトカラーの過重労働も見逃さない）  
**(2)** 相変わらずの悲惨業種（運転手、建設、介護）  
**(3)** 大企業の本社（かとくを設置し全国展開。特にリーディングカンパニー）  
**(4)** 正社員だけでなく非正規も。  
（参考：「週刊ダイヤモンド」2017 年 5 月 27 日号）

## 古典に学ぶ

### 青少年に大事な徳

（解説）立派な名、自己の評判、「自分の不死の部分、それ以外のものは獣と同じ」は、その名の高潔さが侵されでもすると、恥を感じることを当然のことと考えた。恥の感覚（レンチシン「廉恥心」）は、青少年の教育で大事に育てるべき最初の徳の一つであった。「笑われるぞ」、「名が汚れるぞ」、「恥しくないのか」といった句は非行青少年の行動を正すための最後の訴えであった。

（参考：佐藤全弘（訳）新渡戸稲造「武士道」：教文館）